

栖山節考

深沢七郎

深澤山園

翠
中
央
大
學
三
十
五
年



檀山節考

檢印廃止

昭和三十三年一月二十日印刷
昭和三十三年二月一日発行

著者深澤七郎発行者栗本和夫印
刷者曾根盛事印刷所東京都品川
区大井寺下町一四三〇番地扶桑
印刷株式会社原色版印刷者野口
嗣雄原色版印刷所東京都荒川区
日暮里三丁目六六一番地求竜堂
印刷株式会社製本者山岸敬四郎
発行所東京都中央区京橋二丁目
一番地中央公論社電話五九二
一—三〇番振替口座東京三四番

定価二四〇円

目次

檜山節考

一

東北の神武たち

七

揺れる家

二七

深澤七郎氏の作品の世界

伊藤
整

目
次

山と山が連つていて、どこまでも山ばかりである。この信州の山々の間にある村——向う村のはずれにおりんの家はあった。家の前に大きい樺けやきの根の切株があつて、切口が板のように平たいので子供達や通る人達が腰をかけては重宝がつていた。だから村の人はおりんの家のことを「根っこ」と呼んでいた。嫁に來たのは五十年も前のことだった。この村ではおりんの実家の村を向う村と呼んでいた。村には名がないので両方で向う村と呼びあつていたのである。向う村と云つても山一つ越えた所だった。おりんは今年六十九だが亭主は二十年も前に死んで、一人息子の辰平の嫁は去年栗拾いに行った時、谷底へ転げ落ちて死んでしまった。後に残された四人の孫の面倒を見るより寡夫になつた辰平の後妻を探すことの方が頭が痛いことだった。村にも向う村にも恰好の後家などなかったからである。

その日、おりんは待つていた二つの声をきいたのである。今朝裏山へ行く人が通りながら唄つたあの祭の歌であつた。

ならやま
檐山祭りが三度来りやよ

栗の種から花が咲く

もう誰か唄い出さないものかと思つていた村の盆踊り唄である。今年はなかなか唄い出されなかったのでおりんは気にしていたのであった。この歌は三年たてば三つ年をとるという意味で、村では七十になれば檜山まいりに行くので年寄りにはその年の近づくのを知らせる歌でもあった。

おりんは歌の過ぎて行く方へ耳を傾けた。そばにいた辰平の顔をぬすみ見ると、辰平も歌声を追つてゐるやうに顎をつき出して聞いていた。だがその目をギロツと光らせてゐるのを見て、辰平もおりんの供で檜山まいりに行くのだが今の目つきの様子ではやっぱりに気にしてゐてくれなかつたかと思つた。

「伴はやさしい奴だ！」

と胸がこみあげてきた。

おりんが待つてゐたもう一つの声は、実家から飛脚が来て向う村に後家が一人出来たことを知らせに来てくれたのである。その後家は辰平と同じ年の四十五で、三日前に亭主の葬式がすんだばかりだそうである。年恰好さえ合えばそれできまつてしまつたと同じようなものだった。

飛脚は後家になったものがあることを知らせに來たのだが、嫁に來る日までをきめて歸って行った。辰平は山へ行つて留守だったが、おりんが一人できめてしまったというより飛脚の云うことを聞いていただけで万事がきまつてしまつたのである。これで辰平が歸つてくればそのことを話さずすればよいのである。どこの家でも結婚問題などは簡単に片づいてしまうことで、好きな者同士が勝手に話し合つてきめてしまつたり、結婚式などという改まつたこともなく、ただ本人がその家に移つてゆくだけである。仲人が世話をすると云つても年齢が合えばそれで話がきまつて、本人がその家へ遊びになど行つてゐるうちに泊りきりになつて、いつからともなくその家の人になつてしまふのであつた。盆も正月もあるけれども遊びに行く所もないので、ただ仕事をしないだけである。御馳走をこしらえるのは橋山祭りの時だけで何事も簡単にすんでしまふのである。

おりんは飛脚が歸つた方を眺めて、あの飛脚は実家からの使だといつていたが、嫁に來る人の近い身の者だろうと思つた。亭主が死んで三日しかたたぬのに、すぐとんできて話をきめたという様子は後家の後始末がよくよく心配だつたのだらう。うちの方でも急いで來てくれて有難いことだと思つた。來年は七十で橋山まいりに行く年なのだから、この年になつても嫁が

きまらなかつたらどうしようと焦っていたところに、丁度年恰好のうまい話があったものだ、もう少したてば嫁が父親か誰かと向うの方から来るだろうと、肩の荷が降りたように安心したのである。向うの方から嫁が来るというより女が一人来ると想像しただけで一番難しいことが片づいてしまったのだった。孫は総領のけさ吉が十六で男三人、末が女でまだ三つである。辰平も後添がなかなかきまらなかつたので此の頃は諦めたらしく、ぼんやりしてしまい、何かにつけて元気がない様子はおりんも村の人も気づいていたが、これでまた元気をとりもどすだろうとおりんまでが活気づいてきた。

夕方、辰平が山から帰ってきて根っこに腰をかけたとき、おりんは家の中から大声で辰平のうしろへあびせかけるように云った。

「おい、向う村から嫁が来るぞ！ おととい後家になったばかりだけど、四十九日がすんだら来るっちゅうぞ」

おりんは嫁がきまつたことを話すことは手柄話でも知らせるように得意満々だった。

辰平はふり向いて

「そうけえ、向う村からけえ、いくつだと？」

おりんは辰平のそばに飛んで行った。

「玉さんと云ってなあ、おまんと同じ四十五だぞ」

辰平は笑いながら

「いまさら、色気はねえだから、あっぱは」

辰平はてれ臭いのか、おりんに相槌をうつて喜んでるらしかった。辰平は後妻を貰うことより何か外のことだと思いつめていることがあるのじゃないかと、年寄りの勘でそんなことも思ったが、おりんは夢中になって嬉しがっていた。

櫓山には神が住んでいるのであつた。櫓山へ行った人は皆、神を見てきたのであるから誰も疑う者などなかった。現実には神が存在するというのであるから、他の行事より特別に力をいれる祭りをしたのである。祭りと云えば櫓山祭りしかないようになってしまった程である。それに盆と続いているので盆踊りの歌も櫓山祭りの歌も一緒になってしまった。

盆は陰暦七月十三日から十六日までだが櫓山祭りは盆の前夜、七月十二日の夜祭りであつた。初秋の山の産物、山栗、山ぶどう、椎^しや榎^{かや}の実^み、きのこの出あきの外に最も貴重な存在である白米を炊いて食べ、どぶろくを作つて夜中御馳走をたべる祭りであつた。白米は「白萩様」と

呼ばれてこの寒村では作っても収穫が少く、山地で平地がないので収穫の多い粟あわ、稗ひえ、玉蜀黍とうもろこし等が常食で白米はなやま檀山祭りの時か、よくよくの重病人でもなければ食べられないものであった。
盆踊り歌にも

おらの父ちゃん身持の悪さ

三日病んだらまんま炊いた

これは贅沢を戒めた歌である。一寸した病氣になったら、うちの親父はすぐ白米を食べるということで、極道者とか馬鹿者だと嘲られるのである。この歌はいろいろなことにも格言のように使われて、息子が怠けているときなど、親とか兄弟が

おらの兄ちゃん身持の悪さ

三日病んだらまんま炊いた

と唄って、遊びぐせがついているけど、あんな御苦労なしの奴は、白萩様を炊いて食べたなどと云い出しはしないだろうかと警告代りにも使われたり、親の命令をきかないときとか、子が親に意見をするときにも使われるのである。

檀山祭りの歌は、栗の種から花が咲くというのが一つだけであるが、村の人達が諧謔な替歌

を作っていろいろな歌があった。

おりんの家は村のはずれにあったので裏山へ行く人の通り道のようになっていた。もう一月もたてば櫓山祭りであった。歌が一つ出ると次から次へと唄い出されて、おりんの耳にきこえてきた。

塩屋のおとりさん運がよい

山へ行く日にや雪が降る

村では山へ行くという言葉に二つの全く違った意味があるのであった。どちらも同じ発音で同じアクセントだが、誰でもどの方の意味だかを知りわけることが出来るのである。仕事で山へ登って薪とりや炭焼きなどに行くことが山へ行くのであって、もう一つの意味は櫓山へ行くという意味なのである。櫓山へ行く日に雪が降ればその人は運がよい人であると云い伝えられていた。塩屋にはおとりさんという人はいないのであるが、何代か前には実在した人であって、その人が山へ行く日に雪が降ったということは運がよい人であるという代表人物で、歌になって伝えられているのである。この村では雪など珍らしいものではなかった。冬になれば村にもときどき雪が降り、山の頂は冬は雪で白くなっているのだが、おとりさんという人は櫓山へ到

着したときに雪が降り出したのである。雪の中を行くのだったら運の悪いことであるが、おとりさんの場合は理想的だったのである。そしてこの歌はもつと別の意味をも含んでいたのである。それは檜山へ行くには夏は行かないでなるべく冬行くように暗示を与えているのであった。だから檜山まいりに行く人は雪の降りそうな時を選んで行ったのである。雪が降り積れば行けない山であった。神の住んでいる檜山は七つの谷と三つの池を越えて行く遠い所にある山であった。雪のない道を行って到着した時に雪が降らなければ、運がよいとは云われないのである。この歌は雪の降る前に行けという、かなり限られた時の指定もしているのである。

おりんはずっと前から檜山まいりに行く気構えをしていたのであった。行くときの振舞酒も準備しなければならないし、山へ行って坐る筵むしろなどは三年も前から作っておいたのである。やめになった辰平の後妻のこともきめてしまわなければならないその支度だったが、振舞酒も筵も、嫁のことも片づいてしまったが、もう一つすませなければならないことがあった。

おりんは誰も見ていないのを見ますと火打石を握った。口を開いて上下の前歯を火打石でガッガッと叩いた。丈夫な歯を叩いてこわそうとするのだった。ガンガンと脳天に響いて嫌な痛さである。だが我慢してつづけて叩けばいつかは歯が欠けるだろうと思った。欠けるのが楽

しみにもなっていたので、此の頃は叩いた痛さも氣持がよいぐらいにさえ思えるのだった。

おりんは年をとつても歯が達者であつた。若い時から歯が自慢で、とうもろこしの乾したのでもバリバリ噛み碎いて食べられるぐらいの良い歯だった。年をとつても一本も抜けなかったので、これはおりんに恥ずかしいことになつてしまつたのである。息子の辰平の方はかなり欠けてしまつたのに、おりんのぎつしり揃つてゐる歯はいかにも食うことには退けをとらないようであり、何んでも食べられるというように思われるので、食料の乏しいこの村では恥ずかしいことであつた。

村の人はおりんに向つて

「その歯じゃ、どんなものでも困らんなあ、松っかさでも屁つぱり豆でも、あますものはねえら」

これは冗談で云うのではないのである。たしかに馬鹿にして云つてゐるのである。屁つぱり豆というのは雪割り豆のことで、石のように堅い豆で食べると屁ばかり出るので、それを食べて放屁したときには、屁つぱり豆を食つたから、と云つたりして、堅い、まずい豆という意味で云うので、普通は雪割りとか堅豆と云うのである。おりんは人の前で屁をひつたこともない

のに、わざわざ屁っぱり豆と云う言葉を使うのは確かにあざけて云っているので、おりんもよくわかっていた。それと同じような云い方を何人からも云われたことがあるからだ。年をとってから、しかも檐山まいりに行くような年になってもこんなに歯が達者では馬鹿にされても仕方がないと思っていた。

孫のけさ吉なども

「おばあの歯は三十三本あるら」

と云ってからかうのである。孫までかまいづらで云うのである。おりんは指でさわって歯のかずを勘定しても上下で二十八本しかないのである。

「バカこけえ、二十八ぼんしかねえぞ」

と云いかえしても

「へえー、二十八よりさきの勘定は出来んずら、まっとあるら」

と憎まれ口をたたくのである。けさ吉は三十三本あると云いたいのである。去年唄った盆踊り歌で

「おらんのおばあやん納戸なんどの隅で

鬼の齒を三十三本摘えた」

と唄ったらみんなが笑いころげたのである。この歌は村の一番ふざけた歌をけさ吉が更に作り替えたのであった。うちの女親は納戸の隅で秘密のところの毛を三十三本そろえたという歌があつて、これは母親を侮辱する歌であつた。けさ吉はそれを鬼の齒と替えて唄つて大喝采を博したのであった。だからけさ吉としては三十三本あることにしなければつまらないのである。それにおりんの齒は三十三本あるのだとみんなに云いふらしてしまつたのである。

おりんはこの村に嫁に来て、村一番の良い器量の女だと云われ、亭主が死んでからもほかの後家のように嫌なうわさも立てられなく、人にとやかく云われたこともなかったのに、齒のことなんぞで恥ずかしいめにあらうとは思わなかつた。橋山まいりに行くまでには、この齒だけは何んとかして欠けてくれなければ困ると思つたのであつた。橋山まいりに行くときは辰平のしょう背板に乗って、齒も抜けたきれいな年寄りになつて行きたかつた。それで、こつそりと齒の欠けるように火打石で叩いてこわそうとしていたのである。

おりんの隣りは錢屋という家だつた。村では錢など使い道もなく、どの家にもないのだが、錢屋では越後に行つた時、天保錢を一枚持つて歸つたのである。それから錢屋と呼ばれるよう